



尋問貞操帯



某国の平気開発研究所。

ある日、敵国の兵士達がこの研究所を襲撃した。

彼らは、極秘の兵器設計図と研究開発記録が

入ったデータディスクを奪い、

それらのパスワードを持った女性研究員を

拉致していった。

そして今、その女性研究員に対して、

尋問が行われようとしていた。

とある研究所に連れて来られた。
どうやらここで尋問を行うらしい。

「女一人を裸にして、随分臆病なんですね。」

「我々の作戦には、君の持っているパスコードがどうしても必要なんだ。
早く答えれば悪いようにはしないぞ?」

「わたしは絶対にパスコードを言いません。」

その答えを聞くと、尋問印は持っているスイッチの電源を入れた。



手錠が解除されると、わたしの体が勝手に動き出す。
どうやらヘッドバンドの効力で体が操られているようだ。
蟹股のとても卑猥なポーズになると、
私の体はピクリとも動かなくなった。

「随分品のない事をするんですね。この変態。」

「勘違いしないでくれ。君に尋問するにはこれが必要なんだ。」

「それでは、尋問を開始する。」



そういうと、尋問員は私の股間に、
手のひらより一回り小さいくらいの装置を近づけた。
股間に装置が触れると、膣内に棒状の物が侵入してくると、
ピタリと張り付いてしまった。
そのまま、装置はブルブルと震え始めた。



「気持ちいいかい？」

その「貞操帯」はキーが無くては、絶対に外れないようになっていて。
しかも、自動修復装置が付いているから、絶対に壊れない。」

「ん……」

「股間のパネルで絶頂回数が分かるようになっていてる。

明日までにイッた回数が10回未満だったら解放してやってもいいぞ。」

「わたしはこんなものに負けません！」

一日後

「ンギイー!!ンフウウウ!!」

「負けないんじゃないのかい?」
「随分気持ちよかったようだが。」

「スイッチオフ

「う、フウウ...」



「そろそろ吐く気になったかい?」

「こんなことで、わたしは絶対に言ったりしません!」

「それじゃあ、これならどうだろう？耐えられるかな。」
ピッ

貞操帯が振動を再開する。

「あ、んあーや、やめて……も、もうイカせないで……！」

「あ、あうう！イ、イクウ……！」

「……………！？」

だが、絶頂寸前で貞操帯は停止してしまう。



「どうした。イキたくないんだろう？」

しばらくすると、また貞操帯が振動を始める。

「んっ…はあ…ま、また……！」

「イクウ…イツ…ク……！」

ピタ

「ンツふうう……。」

「明日にはどうなってるか。
楽しみだな。」

ヴウン……

股間への刺激が停止すると、別の生理的欲求が主張しはじめた。

「お、おしっこ！」

まだ、ここに来てから一度もトイレに行っていない。
貞操帯に尿道が塞がれているため、漏らす事も出来ないのだ。



「やあ、調子はどうだい？」

「ト、トイレに行かせてください！お願いします！」

「問題ない。その装置が尿の毒素を分解してくれる。
残った水分は体の中に残るけどな。」

「そんなこと言ったって…おしっこ…したいよお…！」

「ンハア…ッ！イッイケない！イケないよお！」

「ただいま、随分楽しそうだね。」

「楽しくなんかない！早く外して！オナニーさせて！アソコいじらないと、おかしくなる！」



「それなら、おとなしく吐いて楽になったらどうだい。」

「ウ……………ウウウ……………フウウ……………」

どんな事をされてもパスコードだけは守らなければ。

歯を食いしばって、必死に股間の切なさや尿意に耐える。

「わたしは明日から一週間出かけないといけないんだ。

まあ面白い物を用意したから、わたしがいない間も存分に楽しんでくれ。」

ピッ

「・・・一週間後
（イク！ま、またイクウ！）」

一週間の間、わたしはこの施設の職員のおもちゃにされ続けた。全身には卑猥なラクガキをされ、それでも身動き一つ取れない。乳首と股間の装置からの快感責めと、惨めな気持ちで、もはやわたしの精神は限界状態だった。



「ただいま変態女。久しぶりだな。」

「お、まだまだ余裕って感じだね。」

「まあわたしは疲れたから、また明日遊んでやろう。」

「い、言いました…！おしっこ…おしっこさせてください…！」

おまんこの…止めてください…！」

「よし、ちょっと待ってな」

ピッ

「あ、うう…」

貞操帯と乳首の装置が停止する。



「はい。解除。」

ピッ

股間の装置が外れると、覆われていた秘部から湯気があがる。

それと同時に、膀胱内で圧縮されていた液体が、
水鉄砲のように飛び出してくる

「あ、あう…！おしっこ…！おしっこ…！」

「おしっこ…きもちいい…きもちいい…!!」
薄っすらと黄色掛かった液体が、
いきおいよく股間から放出される。
もはや恥も外見もどうでもいい。
おしっこが出来ればそれでいい。

「はああ…！イクウ！おしっこイクウ！」
だが、放尿はまだまだ終わりそうにない。
「アヒツ、きもちいい！おしっこ、またイクウ！」

「おしっこ…最っ高…！しあわせ…!!」
人生で最高の恍惚感を感じながら、わたしは放尿し続ける。



「ハア…ハア…」

体をブルルと震わせると、最後の尿液が勢い放出された。それと同時に、こんな事のために国を裏切った自らの愚かさ、段々と絶望を感じ始めていた。

「そろそろ貞操帯を付けてやろう」

「え、あ。ま、待って！」

そう言うと同時に、股間に貞操帯が取り付けられた。

また、あの地獄に戻るのはいやだ。

「わたしもう、言いました！

早く解放してください！」

「兵器開発の『戦争犯罪者』を、わざわざ帰すと思っていたのかい。」

「残念だが、君の罪は重すぎたようだ。」

「君には一生『見せしめ』として生活してもらおう。」

理解しようとするればするほど、怒りと絶望に体が震える。

尋問員が機械のスイッチを操作し始めた。

「まずは、『強制歩行』。」

今まで動かなかったつま先が勝手に動き出す。

しかし、足を閉じる事が出来ない。蟹股のままだ。



「次に貞操帯の制御不能モード」

「ン、ンアア！」

股間の装置が振動を始める。

「最後に各装置の通信装置の破壊」

尋問員がそういうと、貞操帯とヘッドバンドから何やら「ポン」と音がした。

「これでもう、君の体の装置は全て止める事が出来なくなった。」



「さ、もう用は無いから出ていきたまえ。」

わたしの足が勝手に動くと、出口の方向へ歩き出した。

「待って！待って！機械止めて！許して！許してください！」

こんな恰好で生活するなんていやあ！

「達者でな、露出狂の変態女。」

絶望感と羞恥心に襲われながら、わたしの体は街へと歩き出した。

それから、戦争犯罪者として素っ裸で生活するようになった。
羞恥心に襲われながら、見せしめとして無様な生活を送っている。

制御不能となった装置は、徹底的にわたしを虐めてくる。

おしっこが出来ないのはもちろん。

ある時は、寸止めを何日も繰り返したかと思うと、

またある時は快感地獄に何週間も墮としてくる。



今、わたしの股間の貞操帯は、二週間の間、寸止めを繰り返していた。

「オナニー！オナニーしたい！まんこ弄りたいよお！」

理性を完全に失ったわたしは、いやらしい言葉を平気で叫ぶ。

どのみち、わたしは喋る事と蟹股で歩くことしかできない。

そんなわたしへ、神が情けをかけたのか、貞操帯が激しく暴れ始める。

「アッ！い、イク！イケる！久しぶりに気持ちよくなる！」

「イ、イクウー!!」

貞操帯の隙間から勢いよく潮を吹くと、久しぶりの絶頂に体を震わせる。

「あ、アウー! イッたばかりなのに、ま、またイク…!!」

絶頂する事で少しだけ戻って来た思考力が、またあの地獄を思い出させる。

「アヒイ! と、止まって! もうイクのため! イクのもうやあ!」



「イ、イクウー! イクウー!!」

腰がビクビクと痙攣すると、再度絶頂を迎える。

「もうイヤ! ア、誰か止めて! インヒ…ッ! 助けてください!!」

もはや彼女の貞操帯を止める事は出来ない。

彼女の股間は、意思を持たない貞操帯に死ぬまで責め立てられるのだ。



























